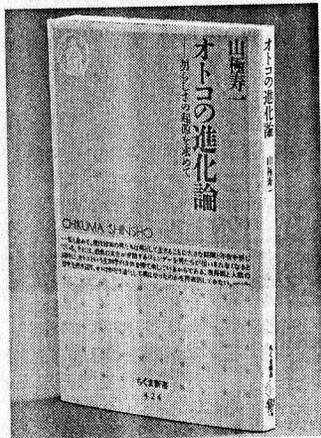


# 「オトコの進化論」

山極 寿一著



ある女性の知人に、「男性に『性衝動』と『腕力』を与えたことは神様の失敗よ」と言われたことがある。私も、漠然とこの二点に「男」として生きることへの疑問と不安を感じつつあったときだ。また最近では他の男性からも、似たような不安の呟きを聞くことが増えた。そんなときこの本と出合った。筆者は長くニホンザルやゴリラの行動観察をしてきた人だ。本書ではそれらをもとに人類の過去を類推し、現在を洞察しようとして試みている。とくに注目されるのが「食」と「性」「暴力」との関係だ。そのことを著者は、まず原猿類から霊長類、類人猿へと至るオスメスの体格差に視点をあて論じている。

夜行性でペア社会の時代にはなかった体格差は、昼間行動し、テリトリーが広がること一挙に変化する。外敵が増えたことで「分業」が起こり、オスに防衛が一手に任されたのだ。

## 身体の性差に視点あて洞察

オスには危険と引きかえに派手なパフォーマンスの力が与えられた。当然、力のあるオスは、メスとの交尾において優位に立った。

だが、興味を引くのは、類人猿だ。ゴリラやチンパンジーのメスがオスに求めるのは、「腕力」の強さだけではない。父系社会の中で、メスは群れと群れとの間を自由に行き来できる権利がある。それは、交尾相手が好ましくなければ別の相手を求め、移動できるということだ。それにより、核オス（群れの中心的存在）であっても、つねに交尾の相手が手に入るという保障はなくなった。メスを引き寄せるだけの別の「力」が必要となったのだ。それは、ただの「腕力」から「信頼」や「相性」へのステップを意味しないか。

また、三百万年前の原人の体重はゴリラ並みの性差があったが、現在の人間はチンパンジー並みに縮まってきていることもわかっている。オスの「暴力」や「性衝動」を抑制することと身体の性差とは、どうやら密接な関係があるらしいのだ。

古き「オス意識のまま生き延びられるか。なんだかわずかなゆらぎが起こってくる本だ。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

◇やまざわ・じゅいち 1952年東京生まれ。京都大大学院理学研究科教授。著書に「ゴリラ雑学ノート」など。

ちくま新書・720円